

宮沢賢治論 —「土神ときつね」異読—

The Study of “Kenji Miyazawa” —An Interpretation of “Tsuchigami and Fox”

高橋直美*
TAKAHASHI Naomi

要旨

童話「土神ときつね」の主人公である土神がいわゆる産土神であることは広く知られているが、実際にどのような神かは明記されておらず、また研究もされていない。そのため、土神が修羅の状態にあるのは、一般に樺の木をめぐる狐との三角関係のもつれが理由だとされているが、果たしてそれだけであろうか。

今回の研究では、土神の性質、住居や環境その他の特徴を考慮しながら土神の正体を考察した。そして、見えてきたのが蝦夷である。氏子からも忘れ去られるような存在、岩手山麓、鉄、修羅という設定を考え合わせると、蝦夷という存在が一つのキーワードのように思われる。

本稿では祀られない神としての土神の苦悩と、周囲に対する怒りの感情を抑えられず、修羅と化した土神の正体とその修羅の実態、そしてその悲劇を考察する。

キーワード：土神、谷地、鉄、蝦夷、修羅

1. はじめに

童話「土神ときつね」の主人公である土神について、先行研究のほとんどが樺の木に対する愛情、狐との三角関係、暴力による修羅に主眼を置いている。確かに、土神の狐に対する感情は陰悪であるが、本当にそれは樺の木をめぐる愛憎だけであろうか。

本稿では土神の正体を探り、その修羅や土神の悲劇について考察する。

2. 土神を取り巻く環境

この物語は「一本木の野原の、北のはづれに、少し小高く盛りあがった所」を中心に展開されている。「いのころぐさがいっぱいに生え」たその野原のまん中に「一本の奇麗な女の樺の木」が、「丁度五百歩ばかり離れたぐちゃぐちゃの谷地の中」に土神が、そして、「野原の南の方」には狐が住んで

* 東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design

連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡 48-1

いるという紹介から始まる。

この一本木野に関して、賢治は詩「一本木野」(1923. 10. 28)に、

こんなあかるい穹窿と草を
はんにちゆつくりあるくことは
いつたいなんといふおんけいだらう
わたくしはそれをはりつけとでもとりかへる
こひびととひとめみることでさへさうでないか

(おい やまのたばこの木
あんまりへんなをどりをやると
未来派だつていはれるぜ)

わたくしは森やのはらのこひびと
芦のあひだをがさがさ行けば
つつましく折られたみどりいろの通信は
いつかばけつとにはひつてゐるし
はやしのくらいとこをあるいてゐると
三日月がたのくちびるのあとで
肱やずぼんがいつぱいになる

と記し、「すみわたる海蒼の天」の下に「きよめられるひとのねがひ」を、心象の風景と重ねて描いた。

また、土神の住まいである谷地であるが、谷地とは低地に開けた湿原であり、有史以前に奥羽山脈の麓の広い範囲にあったものの一つと思われる。

そのような岩手山麓の谷地でもっとも有名なものが春子谷地である。

昔、鞍掛山麓に住む炭焼きの夫婦と一人娘の春子という美しい娘が住んでおり、春子は逢の沢にある「春子谷地」の主「吉さん」と恋におち、吉さんの誘うままに、谷地に入って行き、春子谷地的主になったという話が伝えられている場所で、長い間に亘り、人の手が加えられずに自然が守れたため、珍しい植物がたくさん生えている自然の宝庫でもある。しかしながら、その他の谷地は人口の草地や畑が作られ、人間に占領されてしまった。

土神の住まいであるが、本文に、

土神の棲んでいる所は小さな競馬場ぐらいある、冷たい湿地で苔やからくさやみじかい蘆などが生えていましたが又所々にはあざみやせいの低いひどくねじれた楊などもありました。

水がじめじめしてその表面にはあちこち赤い鉄の渋が湧きあがり見るからどろどろで気味も悪いのでした。

そのまん中の小さな島のようになった所に丸太で拵えた高さ一間ばかりの土神の祠があったのです。

とある。前述の春子谷地は『農民生活変遷中心の滝沢村誌』(福田武雄編 滝沢村教育委員会 2011年4月、以降『滝沢村誌』と記す)に、

この湿原は、鞍掛山山麓の傾斜変換点凹部に位置し、海拔四五〇m前後で約三五haの広さをもつ、腐植栄養型の低層湿原である。(中略) 深さ一m付近まで黒泥土で構成され、岩手火山噴出

の黒色スコリアを多量に混じている（後略）

（「第七章 滝沢村の自然環境保全調査 第一節 春子谷地湿原」）

とあり、この黒色の土は岩手山噴火の遺物であることがわかる。

また『滝沢村誌』「第一編 滝沢村の環境 第三章 土地 第五節 土壌」には、一本木野の緩傾台・平坦凹は半湿で暗褐灰色、透水性の悪い乾いた緩傾台では黒褐色とあり、柳沢の凹地も半湿で黒褐色とある。

その一方で、鵜飼の中堤は褐色で半湿、大部分粘土で一部砂とあるが、ここは一本木野からかなり南下しており、盛岡市に近い。

本文をみると、狐の穴は一本木野の南にあり、「赤土が奇麗に堅められてゐる」とあるため、一本木野のような砂地と粘土が半々、また大部分砂で一部粘土の地質では壁を綺麗に固めることはできない。狐の巣穴を考えると、上記鵜飼の中堤や赤壁土で有名な同滝沢村の鬼越坂のような粘土質でなければ無理である。

これらのことから、樺の木や土神の住まいは一本木野の一般的な土質であるのに対し、狐の住まいはそれらと異なっていることがわかる。

次に、土神の容貌や性格についてであるが、「土神の方は神といふ名こそついてはゐましたがごく乱暴で髪もぼろぼろの木綿糸の〔束〕のやう眼も赤くきものだってまるでわかめに似、いつもはだしで爪も黒く長」く、樺の木に会っても狐の話が出たとたんに機嫌が悪くなり、祭りの話でさらに激昂すると「土神は日光を受けてまるで燃えるやうになりながら高く腕を組みキリキリ歯噛みをしてその辺をうろうろしてゐましたが考へれば考へるほど何もかもしゃくにさはって来るらしいのです。そしてたうたうこらえ切れなくなって、吠えるやうにうなつて荒々しく自分の谷地に帰って行つ」たとあるほど荒々しい性格をしている。土神の風貌が長年に亘り全く手入れされていないのは、あきらかに長い間民衆からの信仰が途絶えていることを意味している。

そして、その性質の荒々しさは火山である岩手山を体現しているとも考えられる。

岩手山の東側はなだらかな裾野であるが、西側は荒々しい岩稜である。岩手山は生成の古い西岩手火山と、その東部に新しく生成した東岩手火山で成り立っている。北東斜面の焼走り熔岩流は、1732（享保17）年の噴火で形成されたものであり、黒い溶岩が末端まで約3km、幅約1kmの扇形に広がっている。岩手山は1686年、1731年と大噴火を起こし、1919年にも小噴火（水蒸気爆発）を起こしており、この作品ができる数年前の1919年（大正8年）にも噴火するなど、荒々しい山でもある。

ところで、土神の住まいには「水がじめじめしてその表面にはあちこち赤い鉄の漬が湧きあが」っているが、これはリモナイト（Limonite＝褐鉄鉱）ではないだろうか。リモナイトとはかつて製鉄の重要な原料であったが、現在では黄色絵の具の原料として採掘されることが多くなった鉱物である。

しかも、褐鉄鉱は「沼鉄鉱」ともよばれているように、沼地や浅い海などで鉄を含む水に沈殿作用が起き、その結果形成されるものである。このリモナイトの産地としては阿蘇が有名であるが、阿蘇も岩手山も火山噴火の産物であるため、状況はよく似ているのではないかとと思われる。

しかも、このリモナイトは鉄分を多く含んだバランスの良いマルチミネラル成分が土壌を活性化させ、農作物の成長に効果的であり、土壌内に含まれるガスを吸着して根の成長を助ける働きもあるため、農業に有益であるとされている。熊本や阿蘇の大自然では、リモナイトを使用した農作物の生産

も行われている。また、今日では、リモナイトを鉄分などのミネラルを土壌などから補給している動物の飼料にすることもある。

ところで、リモナイトを大量に生産している阿蘇には、阿蘇神社がある。この神社の一宮は火口で、一の宮町宮地にある社殿は下宮となっており、岩手山神社と構造が似ている。この神社は、阿蘇開拓の祖神と伝えられる健甕龍命をはじめとする十二神をまつる由緒ある神社で、古くから農業の神としてあつく尊崇されている。

また、日本で一番美しい火山であり富士山信仰の拠点である富士山本宮浅間大社は、静岡県富士宮市に本宮を、富士山山頂に奥宮をもつ。木花之佐久夜毘売命（別称 浅間大神）を主祭神とし、夫神の瓊々杵尊と父神の大山祇神を配祀し、奥宮の分社である久須志神社には大名牟遲命、少彦名命を祀っているが、この富士山本宮浅間大社には、岩手山神社に祀られている日本武尊と坂上田村麻呂も関係している。

このように、火山と神社の関係を見ていくと、山の神や国造りの神、国土平定の英雄などとゆかりがあることがわかる。

また、谷地に浮くりモナイトと、岩手山麓に住まう神＝山神を考えれば、『古事記』に登場する金山毘古神（『日本書紀』では金山彦神と表記）という鉱山の神が思い浮かぶ。この神は、神産みにおいて、伊邪那美神（伊弉冉神）が火の神である火之迦具土神を産む際に火傷を負い、苦しんでいるときにそのたぐり（嘔吐物）から化生した神である（『古事記』では金山毘古神・金山毘売神の二神、『日本書紀』の第三の一書では金山彦神のみが化生している）。

また、この伊邪那岐神（伊弉諾神）・伊邪那美神（伊弉冉神）の二柱が国生みの後に生んだのが山の神の大山祇神である。

金山毘古神は名の通り「金山＝かなやま、鉱山」を司る神である。この神が誕生した嘔吐物はリモナイトなどの鉱石や鉱山や、「その表面にはあちこち赤い鉄の渋が湧きあがり見るからどろどろで気味も悪い」と記されている土神の谷地の様子と類似している。この金山毘古神は鉱山を司る神、荒金を採る神とされており、鉱業・鍛冶など、金属に関する技工などを守護する神と考えられている。土神も岩手山麓に住み、金属に所縁のあることからこれらの神々と関係があるのではないだろうか。

上記の富士山本宮浅間大社のご神体である木花之佐久夜毘売命は、社伝によるとその水徳で、噴火を鎮めたとある。

ところで、土神の祭りに関して本文に、

「もうあなたの方のお祭も近づきましたね。」土神は少し顔を和げました。

「さうちゃ。今日は五月三日、あと六日だ。」

土神はしばらく考へてゐましたが俄かに又声を暴らげました。

「しかしながら人間どもは不届だ。近頃はわしの祭にも供物一つ持って来ん、おのれ、今度わしの領分に最初に足を入れたものはきっと泥の底に引き擦り込んでやろう。」土神はまたきりきり歯噛みしました。

とあることから、社の存在自体、氏子にさえ見放されていることがわかる。

滝沢村内の神社を見ると、大釜には八幡宮・落合不動尊・諏訪八幡宮・末社山神・庚申堂・稲荷社、篠木には田村神社・山王社・自松蒼前、大沢には熊野神社、稲荷神社、鵜飼には駒形神社・月読社・

山祇祇祠、滝沢には角掛神社・山神祠・白沢神社・本覚明神・岩手山神社等がある（『滝沢村誌』「第五編 社寺の変遷 第三章 神社」）。

しかしながら、土神の祭日である5月9日にこの近辺で祭りはない。ただ、民間の神祭りとして、神霊に酒を供え、持ち寄った煮しめや山菜・漬物で、村の神々と一日を過ごす「オミキアゲ」という行事がある。これは岩手県北部地方では旧暦5月から6月頃に行う共同祭祀である。

また、土神の住居が広さ一間の祠であること、祠のある場所が谷地であることから、土神の正体は山神や土地に所縁のある神霊だと考えられるが、氏子でさえも近寄らないことから、祟り神か荒御霊の類だとも推察される。

『滝沢村誌』によると、行政区域を氏子とする産土神は、氏子総代とその年成人になった青年によって祭典や維持管理され、用水堰の開鑿やその維持、森林や採草地の経営等多くの人々が協力を必要とする事業や、共同生活を統制するためのきまりを作ることに役立っていたとある。村のおきてや村寄合等の合議制度が生れたのも氏子制度からであるため、これら血縁及び地縁関係の結束を固めるためにも産土神と氏子制度は重要なものであったと記されている。

この地の産土神である土神はその土地の神として、鎮守と同一視される存在でありながら、氏神信仰もないどころか、氏子が恐れて近寄らない状況である。しかし、神は祀られるから神であり、祭祀を怠ると祟りをなすとも考えられている。

柳田國男は、妖怪は神の零落したものであると考えたが、小松和彦は靈魂＝「玉」＝感情の元としてとらえ、妖怪を「玉」＝霊が怒っている状態、神は祀り上げられた霊としているため、妖怪が祀られて神になる場合もあるとしている。

このように、土神は神というよりも、妖怪に近い存在と化してしまったのである。

3. 土神の正体

湿原の神といえば、アイヌ語では、サロルンカムイ（湿原に住む神）と呼ばれるタンチョウが有名である。白鳥とクマは非常に仲が悪いといわれ、白鳥はクマを見かけると攻撃するとされている。

岩手県岩手郡滝沢村柳沢にある岩手山神社は、明治2年の神仏分離令により、阿弥陀如来・薬師如来・観音菩薩を権現の本地としたとされる岩鷲山権現から、祭神が顕国魂大神（大穴牟遲命）・宇迦御魂命・倭建命となった社である。この社は上述のとおり里社であり、奥宮は妙高山の東側火口に鎮座している。

宇迦之御魂命は五穀を掌る神である。「ウカ」とは穀物・食物の意味で、穀物の神とされ、京都の伏見稲荷大社の主祭神でもあり、稲荷神として広く信仰されている。

倭建命は、東夷鎮定（国土平定）の神であるが、倭建命は坂上田村麻呂同様にまつろわぬ民を討伐した英雄として、同じく岩手県にある東磐井郡室根村の室根山（鬼首山）には日本武尊の鬼神退治の伝承がある。

岩手山神社の主神である顕国魂大神は、またの名を大国主神・大穴牟遲神・大物主神といい、伊弉諾・伊弉冉二尊以前に、この豊葦原の中津国（日本）を経営巡化し、斯民を安堵せしめ、医薬の法を創め、海内を統一して、天孫降臨にさきだって建国の基礎を定め、後、この国を天孫に譲った神であ

る。、『滝沢村誌』「第五編 社寺の変遷 第三章 神社」)

また、大穴牟遲命は大国主神の名では大国を治める帝王の意であり、大穴牟遲神（大那牟遲神）の大は美称、牟遲は貴人の意とされる。洞穴の神、火山の噴火口の神、偉大な鉾穴の貴人（穴は鉄の意があるという）の意ともいわれている。この大穴牟遲神・大穴持命・大己貴命は大国主を名乗る前の名である。また、八千矛神は矛が武力の象徴であることから武神としての性格を表し、葦原醜男・葦原色許男神は「しこを」が強い男の意であるため、武神としての性格を表す神とされている。

角掛神社の祭神は、大山祇命と坂上田村麻呂の二神である。大山祇命は山の神で富士山本宮浅間大社の祭神であり、同社の主祭神である木花之佐久夜毘売命の父神でもある。坂上田村麻呂は大武丸征伐や蝦夷征伐で有名な国土平定の英雄である。

駒形神社は愛馬精神から生まれた神社である。この神社の縁日は、かつては端午の節句（旧暦5月5日）であったが、この時期は田植え前の重労働が続くため、この日を休息日とし、神社の境内で一日を過ごす風習が生まれたとされている（『滝沢村誌』「第五編 社寺の変遷 第三章 神社」）。この日に開催されるチャグチャグ馬コは賢治も詩に詠んでいる。

以上のような神社や神が土神の周辺にきちんと祭祀されている。

土神の住まいは谷地で「水がじめじめしてその表面にはあちこち赤い鉄の渋が湧きあが」るが、湧水である。湧水は供給が安定しているために農業用水として利用され、伝統的に地域の共有資源として住民に利用管理されていた。

しかし、上水道や農業用水路の整備、大規模な工業用水など地下水の汲み上げ利用に伴い、湧水の利用や管理は地域住民の手から離れつつあることから、そのような湧水、水源の荒廃が危惧されているといわれている。

しかも、土神の住まいにある湧水は「あちこち赤い鉄の渋」が浮く状態であり、鉄分は豊富であるが清水ではないため、地元民の生活用水や灌漑用水としての活用は疑問であり、当然のことながら氏子による保護・管理もされなかったと思われる。

明治維新の廃藩置県により多くの神社は藩の援助を受けられなくなった。しかも、いわゆる神仏分離令により稲荷社や祠などが神社の小社として遷座させられ、同系列の神社に合祀された。しかしながら、下記の山祇神祠など、規模は小さくとも氏子により、きちんと祀られていたことがわかる。

○山祇神祠

享保のころ（1717-36年）姥屋敷に上厨川より移住した佐々木某なる人があった。この地の石川某と心を合せて最も風致に富み神域として最適の現地に大山祇の大神を勧請し産土神として部落一同九月十二日を祭日と定めて祭典を執行し、厚く崇拝をしていた。

維新前雫石新山例祭のときには度々別当の自光坊が護摩祈祷をなしたという。その後社祠風雨にあらされ、腐朽したので大正四年（1915年）九月全部落民協力して二間四面の社殿を建立し、遷座祭を取行った。

（『滝沢村誌』「第五編 社寺の変遷 第三章 神社」）

これに対して、土神は遷座も合祀もされず、氏子からも見捨てられた、あるいは、近づきたい存在である。

しかし、土神は祭日がきちんと決められている神である。祭りとは祀りであり、古くは「神和ぎ」

といい、古神道などではご神体・神奈備・磐座などに宿る魂や命が荒ぶる神にならぬよう祈ることであり、それらが道祖神や地蔵や祠や塚や供養塔としての建立や、日々の感謝や祈りへとつながったのである。そして、祀られなければ神は和御霊から荒御霊へと変貌する。

土神の狂気じみた荒々しさは土神の祀られない境遇が大きく影響していることは明白である。

詩「三一三 産業組合青年会」(1924.10.5.)に、

祀られざるも神には神の身土があると
あざけるやうなうつろな声で
さう云ったのはいったい誰だ 席をわたったそれは誰だ
(中略)
まことの道は
誰が云ったの行ったの
さういふ風のものでない
祭祀の有無を是非するならば
卑賤の神のその名にさへもふさはぬと
応へたものはいったい何だ いきまき応へたそれは何だ
(中略)
祀られざるも神には神の身土があると
老いて眩くそれは誰だ

とあるが、ここに登場する神は土神同様、祀られない存在である。荒御魂とはよく言えば神の勇猛な魂（エネルギーな魂）であるが、荒らぶる魂として、天変地異や疫病の流行や人心の荒廃・戦争などに象徴される神の祟りでもある。

反対に、自然の恵みや恩恵など神の加護は和御魂である。土神が神でありながら、必要以上に性格が荒々しいのは〈祭祀〉に起因するのではないだろうか。

そして、その異様な風貌や荒々しい性質はまた、妖怪や鬼を連想させる。そして、岩手の蝦夷伝説には必ずといってよいほど鬼が登場する。

岩手山には坂上田村麻呂に討伐された蝦夷の鬼神・大武丸伝説がある。

大武丸は姥屋敷南方の「長者館」を根城として、紫波・稗貫・下閉伊地方に十一人の親分を配置し、略奪を繰り返した。身長は大きく、顔は醜く、機敏で七、八人力を持ち、山木（削らぬ木）の強い弓を引き、戦術頗る巧みで、大酒を好み、常に婦女子を側に侍らせていたため、坂上田村麻呂も敗走したことがあったが、雫石西根の篠崎八郎を案内役として大武丸を追廻して転戦し、岩手山の九合目の鬼ガ城から大武丸を攻めた。大武丸は隠堀山の北側の坂を下ったので鬼越坂と名付けられ、外鬼越・鬼古里山の地名が現存している。このように、大武丸は乱暴粗豪を極めたことがうかがえるが、一方で、鬼越についてはアイヌ語のオニンコシュという、迂る場所を意味し、アイヌは雨降りや、雪中傾斜している赤壁土の場所をオニンコシュと称して警戒し、後、これを漢字にあてはめて現在の鬼越になったものであろうともいわれる（『滝沢村誌』「第二編 滝沢村の史的概観 第二章 滝沢村と田村麻呂」）。

ところで、鉄と鬼とは各地でその関係性が注目されている。赤坂憲雄編集「東北学 vol. 2」の内藤

正敏「赤倉山の鬼神―津軽・鬼神社民俗誌」には、青森県の鬼神社や巖鬼山神社（岩木山の麓にあり、大同2年に坂上田村麻呂が建立※筆者註）などに伝わる民俗が紹介されており、鬼神社では、鉄製の古い農機具がご神体して奉られている事や古来の神事と鬼伝説との関係、この地方の製鉄と鬼伝説との関わり等が述べられている。

一般に、伝説に登場する鬼が赤い顔をしているのや髪がぼさぼさなのは、鍛冶が鉄を打つ様子に由来しているともいわれている。

また、製鉄には大量の森林伐採や砂鉄・鉄鉱石採取のための山の切り崩しや川流し等による山の荒廃、そしてそれに端を発した自然災害が伴うため里人との抗争が勃発し、里人に害を与えることや生活文化が違うことから山の民が里人から鬼や悪者とされたともいわれている。

「土神ときつね」の本文に、

その時谷地の南の方から一人の木樵がやって来ました。三つ森山の方へ稼ぎに出るらしく谷地のふちに沿った細い路を大股に行くのですがやっぱり土神のことは知ってゐたと見えて時々気づかはしように土神の祠の方を見てゐました。けれども木樵には土神の形は見えなかったのです。とあり、この木樵は土神を知っていることから地元民である。姿が見えないのは、この木樵に土神への信仰心がないからであろう。しかし、それでも「時々気づかはしように土神の祠の方を見て」いることから、その存在を気にしていることがわかる。

木樵が気にすることから山の神と考えられる。山の神の中でも、「あちこち赤い鉄の洪が湧きあが」る場所が住まいになっているため、鉄にゆかりのある神であるとおもわれる。

山の神は木樵・猟師・木地師・製鉄民の祀る神と、農耕民の祀る神との両方が存在する。山にゆかりのある職業に関わる神は山に存在し、農耕の神は稲作の神として、田と山とを行き来する。

田の神としては稲荷神が有名であるが、稲荷神を祀る稲荷神社の総本宮は伏見稲荷大社で、前述のように宇迦之御魂大神（岩手山神社では宇迦之御魂命と表記）を主祭神として祀っている。この神は別名を御饌津神（ミケツカミ）という。狐の古名である「ケツ」と混同し、同一視されたことから、狐は稲荷神のお使いとされたという説が一般に知れ渡っている。この狐に対する勘違いはまた、樺の木への尊敬と似ている。

しかし、土神は宇迦魂命というよりは鉄との関連が深い鉄山系かあるいは坂上田村麻呂遠征以前にいた神（蝦夷にゆかりのもの）、あるいは鉄と蝦夷とが結びついた神であると考えられる。昔は製鉄や山仕事で祀られた古の神が、岩手山麓の農耕地化により、信仰対象から外れて次第にその存在を忘れられたか、異質の神として祭祀が途絶えたと考えられる。蝦夷にゆかりのある神であれば、邪悪なもの、あるいは鬼としてその距離はなおさら離れていく。

反対に、狐は稲荷神の眷属あるいは使いとされてきた動物である。製鉄や蝦夷が過去の実在であるのに対し、狐は稲作の象徴として近代を表しているともいえよう。

また、狐の話が星や西洋や理論など、自らの経験がなくても知識として知り得るもの、そして自分の生活とはかけ離れた話題であるのに対し、土神の話題は地に足の着いた身近なものであることがわかる。

しかも、狐は星の色について知ったかぶりをしたまま誤魔化したのに対し、土神は草の色の本質について素直にわからない、不思議だと認めていることから、土神が土地を愛し、素直で純朴な面を持つ

ていることがわかる。本文にあるよう、「たゞもしよくよくこの二人をくらべて見たら土神の方は正直で狐は少し不正直」なのである。

土神の狐に対する怒りは、畜生の分際で樺の木と仲がいいということだけではなく、狐の性格そのものにも向けられている。樺の木に対して正直で、樺の木を大切にする土神は、平然と樺の木に嘘をつき、その純粋な心を弄ぶ狐に対し、「狐の如きは実に世の害悪だ。たゞ一言もまことはなく卑怯で臆病でそれに非常に妬み深いのだ。うぬ、畜生の分際として。」と述べている。土神は狐を恋敵というより、樺の木を害する悪だと考えていることがわかる。土神は狐の害悪から樺の木を守らなくてはならないと考えたのではないだろうか。

その一方で、谷川雁が「なぜ退職教授なのか『土神ときつね』の二項対立から」（『国文学 解釈と鑑賞 49号13巻』1984年11月 至文堂）で述べたように、産鉄民と土神との関係性から、樺の木が土神に抱く恐怖の正体が製鉄の際に必要な木々の伐採であるとも考えられる。岩手山における産鉄民はいわゆる蝦夷と呼ばれた人々であり、滝沢村にはその痕跡が大武丸伝説として処々に残っている。

4. 土神の修羅

一方、狐が単に土神を樺の木に対してのライバルとして疎んじたのであれば、樺の木の好意は狐に向けられていたことが明確であるため、樺の木が恐れる土神をライバル視する必要はない。

また、土神の荒々しい気質を恐ろしいと思うならば、「狐は土神の居ののを見るとはっと顔いろを変へました。けれども戻るわけにも行かず少しふるえながら樺の木の前に進んで来」ることなく、その場で戻ればよいだけである。狐は樺の木と土神との間に「妬ましさに顔を青く」する要素はないのである。

ここで重要なのは、樺の木から好意を得ている狐が、樺の木をめぐる関係では常に優位に立っているのに反して土神を疎ましく思う理由は何かということである。

草稿に題名の右方やや上寄りに、赤インクの大きな字で、「土神、……[休→退]職教授 きつね……貧なる詩人 樺の木……村娘」と書かれている。

狐が貧なる詩人であることは、その言動、そしてレーンコートのかくしの中のちゃいろのかもがやや巢穴の様子からも理解できる。樺の木の村娘もその純情な性格や自然との関係性で理解できるが、土神の持つ退職教授との関係性はその気難しさと過去の名誉程度しか見つからない。しかし、どうしても狐が土神にかなわないものがある。それは土神の神としての立場と狐の畜生という立場の差である。いくら知識があり、紳士的に振舞っても狐は畜生界であるのに対し、どれほど荒々しい気性であっても土神は天界の神であり、神としての権威も力も持っている。

これを賢治自身に当てはめると、詩人としての自分と研究者・農業指導者としての自分との相克とも考えられるだろう。自由と束縛、理想と現実など、様々なものが狐と土神のように二律背反して葛藤しあい、苦悩の種となって自らを苦しめていた。

退職教授である土神が何も知らない夢見る村娘（樺の木）に執心するのは、恋愛感情というよりも、むしろ自らが無くしたその特性（純粋さや素直さ、豊かな想像力、生命力などの「美しいもの」）を樺の木が持っていること、そしてなによりも自分を認めてくれていることであろう。相手を尊重し、

その存在をありのまま認めて受け入れる樺の木は、土神だけでなく、狐にとっても自分の存在を確かめる大切な存在であった。

退職教授も貧なる詩人も、双方とも世間的な価値においてはかわらないだろう。現役の教授や大詩人とは世間の眼が違う。そのような二人を尊重し、きちんと認められる樺の木は修羅と化した賢治が失った「純粹で美しい特性」であるとも考えられる。

誰からも相手にされずとも、土神には神としての立場と尊厳がある。しかし、立場があればあるほど、その孤独感は絶望へと繋がっていく。「小岩井農場 パート9」に、

もしも正しいねがひに燃えて
じぶんとひとと万象といつしよに
至上福しにいたらうとする
それをある宗教情操とするならば
そのねがひから碎けまたは疲れ

とあるよう、「どうしてもどうしてもさびしくてたまら」なくなり、孤独を慰めてくれる何か（誰か）を求めた結果、その対象が自分を認めてくれる樺の木だったのではないだろうか。

神とは名ばかりで友人もおらず、祭祀されることもなく粗末な祠に住んでいる土神は、神でありながら自分の感情を制御することができなくなってしまう。賢治は大正9年（6月～7月）保阪嘉内あて封書に、

私なんかこのごろは毎日ブリブリ憤ってばかりゐます。何もしやくにさわる筈がさっぱりないのですがどうした訳やら人のぼんやりした顔を見ると、「え、ぐずぐずするない。」いかりがかって燃えて身体は酒精に入った様な気がします。机へ座って誰かの物を言ふのを思ひだしながら急に身体全体で机をなぐりつけさうになります。いかりは赤く見えます。あまり強いときはいかりの光が滋くなって却て水の様に感ぜられます。遂には真青に見えます。確かにいかりは気持が悪くありません。

と記しているが、これは賢治の修羅の感情であると同時に、土神の修羅の感情でもあるだろう。土神は単に乱暴で荒々しいだけの存在ではない。「おれはむしゃくしゃまぎれにあんなあはれな人間などをいぢめたのだ。けれども仕方ない。誰だってむしゃくしゃしたときは何をするかわからないのだ」と一人で切ながってばたばたするようなぎりぎりの状況におかれてしまった、哀れな存在なのである。

確かに土神の樺の木への思いは、恋愛めいている。「春日呪〔詛〕」（1922.4.10）の、

いつたいそいつはなんのざまだ
どういふことかわかつてゐるか
髪がくろくてながく
しんとくちをつぐむ
ただそれっきりのことだ
春は草穂に呆け
うつくしは消えるぞ
（ここは蒼ぐろくてがらんとしたもんだ）
頬がうすあかく瞳の茶いろ

ただそれつきのことだ

(おおこのにがさ青さつめたさ)

とある修羅の恋愛感情でもあるだろう。賢治の場合、この「にがさ青さつめたさ」は自分の弱さが噴出し、異性に代表される美しいものへの憧れが、信仰心・向上心との葛藤により生じた修羅に陥ってしまう。このように激昂する修羅の感情は、「春と修羅 (mental sketch modified)」(1922.4.8)に、

心象のはひいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の〔湿〕地
いちめんのいちめんの詔曲模様
(正午の管楽よりもしげく
琥珀のかけらがそそぐとき)
いかりのにがさまた青さ
四月の気層のひかりの底を
唾し はぎしりゆききする
おれはひとりの修羅なのだ

と記されているが、人間よりもより高みにあるべき神(土神)の煩悶は、人間である賢治の比ではない。神としての自覚や誇りが強ければ強いほど、立場が高ければ高いほど、人々から見捨てられた孤独や寂しさに打ちひしがれそうになる弱さと本来の神としての自覚に落差が生じ、葛藤が激昂する。祭祀されない神である土神は高みを目指せば目指すほど、ますます激昂し修羅の底に堕ちてしまうのである。

上記封書には、「人間の世界の修羅の成仏。(中略)かなしみはちからに、欲りはいつくしみに、いかりは智慧にみちびかるべし。」とあるが、土神も自らの修羅に対して、「俄に両手で耳を押へて一目散に北の方へ走りました。だまってゐたら自分が何をするかわからないのが恐ろしくなった」ため、「息がつまなくなつてぱったり倒れ」るまで一目散に走って行き、「草をころげながら」大声で泣くなど自製の努力をしている。しかし、どのように頑張ろうともその辛さや切なさ、やりきれなさに振り回され、絶望の淵に立つてしまうのである。

このような土神の背中を押して地獄へ落としたのが、畜生の分際である狐である。土神の逆鱗である〈存在を無視〉し、ありもしない高価な望遠鏡を自慢したことで土神を冒瀆し、聖なる樺の木を土神の目の前で騙し(冒瀆)してしまう。

怒りで我を忘れ、修羅の炎に飲み込まれた土神は、修羅に焼かれて狐を殺害する。この瞬間、土神は天界から修羅界を通り越して、地獄に落ちてしまうのである。不妄語戒を犯してきた狐は、土神に殺されたことでこれ以上樺の木を騙すことはできなくなったことに安堵し、また神というだけで自分よりも高位であることが許せなかった土神を地獄に落としたことで自分の心の苦しみから解放され、「うすら笑った」ような死に顔をしているのである。

杉浦静「賢治文学における『死』のイメージと〈臨終正念〉」(『近代文学論 第7号』1976年3月 東京教育大学日本文学研究科分銅研究室内)を嚆矢として、賢治作品における死の間際の「笑い」を臨終正念と結びつける論もあるが、「土神ときつね」における狐の「うすら笑った」ような死に顔は

決して臨終正念ではない。臨終正念とは臨終に際して正念をもつこと、つまり、親鸞は臨終の間際に念仏を唱えること、日蓮は臨終の間際に題目を唱えることと説いている。この臨終正念はもちろん雑念など混じっていては成らず、狐のように「『もうおしまひだ、もうおしまひだ、望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡』と狐は一心に頭の隅のところで考」えていては得られない。しかも、狐の死に顔である「うすら笑い」は相手を馬鹿にしたような表情であり、雁の童子や「ひかりの素足」の櫓夫のかすかに笑ったような表情とは異なるため、成仏の相とはまったく異なっているのである。

5. まとめ

かつては神として祀られ、人々の信仰を受けてきた土神は、時代の流れとともに忘れ去られ、孤独に苛まれた。聖なる神としての威徳もなくなり、その苦悩から逃れるように、自分を認めてくれる樺の木に憧れを抱く。そして、土神の樺の木への憧れは、「たゞ一言もまことはなく卑怯で臆病でそれに非常に妬み深い」世の害悪であり畜生の分際でありながら樺の木を手玉に取ろうとする狐に対して敵意を抱かせる。

そのため、孤独に苛まれ、樺の木に対する思いが強くなればなるほど狐に対する憎悪が増し、いやしくも自分は神であるという意識を持つほどその葛藤の修羅が激昂してしまう。

そして、ついに狐が土神の存在を無視したことで、土神の修羅の要因である孤独感や焦燥感から修羅に火が付き、狐を殺してしまうのである。

この物語の悲劇は、狐の死ではなく、土神と狐の孤独な境遇にある。存在が認められないことによる孤独と悲しみ、そしてそれらを浄化しようとする祈りと聖なる存在への憧れとそれを汚そうとするものに対する怒り、そして状況打破を願えば願うほど向上心と現実との落差から生じる修羅から逃れられなくなった孤独が引き起こした悲劇である。憧れや恋愛感情は、賢治自身も「宗教風の恋」(1923.9.16)に、

ほんたうにそんな偏つて尖つた心の動きかたのくせ
なぜこんなにすきとほつてきれいな気層のなかから
燃えて暗いなやましいものをつかまへるか
信仰でしか得られないものを
なぜ人間の中でしつかり捕へやうとするか

と述べたように、信仰と相容れず、向上心との葛藤しか生まない修羅の源でもあるが、それはまた孤独や寂しさを癒してくれる存在であるように感じられるものでもある。

賢治自身、環境への不満や信仰上の孤独、恋愛感情など、いくつもの修羅を抱え、それらが混じり合い激昂した結果、「おれは一人の修羅なのだ」という状況に陥ってしまう。

そのような修羅とともに重要なのが、蝦夷という存在である。

盛岡高等農林学校3年生の1917年の8月から9月にかけて、江刺郡地質調査に出かけた賢治はこの地方の剣舞を見て激しく心打たれ、「うす月に かがやき出でし踊り子の 異形のすがた 見れば泣かゆも」をはじめとする4首の短歌を詠み、「人首ニテ 賢治拝」と記して9月3日保坂嘉内に葉書で送り、その後「原体剣舞連 (mental sketch modified)」(1922.8.31)、「人首町」(1924.3.25)などの

詩をつくっている。これらのことと土神の設定が蝦夷をイメージさせることの間には関係性があるのではないかと考えられる。

上記の短歌は、蝦夷の大武丸の子である人首丸にゆかりの地で記されたものである。人首丸は大森山で田村麻呂の女婿の田村阿波守兼光に討たれてしまうが、不憫に思った兼光により観音堂（玉里に移された大森観音）が建立される。明治8年まではこの地を人首村と称したが、人首の村名を忌んで米里に変更してから、次第に人首丸を供養する気持ちも失せ、その墓とされる「鬼っこの墓」も忘れられてしまったそうである（『岩手民間信仰事典』岩手県立博物館 平成3年）。それにもかかわらず、賢治はわざわざ「人首ニテ」と記したのである。ここに賢治の想いを見ることができるのではないだろうか。

このように、土神は蝦夷同様、かつては東北ゆかりの存在として祭祀されたが、今では過去のものとして人々から忘れ去られた悲劇の存在であると考えられる。

そして、最後の部分できつねが見せる「うすら笑った」ような死に顔は、決して臨終正念ではなく、これからは良心に反して樺の木を騙すことがなくなった安堵と、土神からは腹立たしいその尊厳をはく奪してやったという満足の笑いなのである。

参考資料：

『新校本 宮澤賢治全集』筑摩書房 1995年

『底本 柳田國男集』筑摩書房 1968年

『日本を知る事典』社会思想社 1988年

岩手県立博物館『岩手民間信仰事典』1993年 （財）岩手県文化振興事業団

『宮澤賢治の全童話を読む』学燈社 2003年

赤坂憲雄『東北学 忘れられた東北』講談社学術文庫 2009年

五来重『宗教歳時記』角川文庫 2010年

大塚常樹『宮澤賢治 心象の記号論』朝文社 1999年

天沢退二郎『宮澤賢治の彼方へ 増補改訂版』美成社 1977年

赤坂憲雄編集「東北学 V o l . 2」東北芸術工科大学東北文化研究センター 2001年

福田武雄編『農民生活変遷中心の滝沢村誌』2011年 滝沢村教育委員会 平成23年10月19日23時最終閲覧

<http://www.vill.takizawa.iwate.jp/contents/sonshi/web/index.html>

The Study of “Kenji Miyazawa” —An Interpretation of “Tsuchigami and Fox”

TAKAHASHI Naomi

‘Tsuchigami’ which is the leading character in the fairy tale of “Tsuchigami and Fox” is ‘Ubusunagami’ but what kind of God it is not specified in the fairy tale. So, when we considered the nature of ‘Tsuchigami’, its house and environment, or its characteristics, its true character was iron and ‘Aramitama’. If we judge by these and the stage of the foothills of Mount Iwate, it seems to be ‘Ezo’. ‘Tsuchigami’ was unable to control the feelings of agony and anger as a God which is not worshiped, so it disguised itself as ‘Ashura’. In this study, we examine ‘Tsuchigami’'s true character, its ‘Shura’, and ‘Tsuchigami’'s tragedy.

Keywords: ‘Tsuchigami’, ‘Yachi’, Iron, ‘Ezo’, ‘Shura’